（男性　10～12 歳、女性　10～12 歳）
「避妊法」
（男性　13～15 歳、女性　13～15 歳）
「人工妊娠中絶」
（男性　13～15 歳、女性　13～15 歳）
「エイズとその予防」
（男性　13～15 歳、女性 13～15 歳）
「エイズ以外の性感染症」
（男性　13～15 歳、女性 13～15 歳）
「コンドーム使い方」
（男性　13～15 歳、女性 13～15 歳）
「多様な性のあり方」
（男性　13～15 歳、女性 13～15 歳）
「性的被害の対処法」
（男性　13～15 歳、女性 13～15 歳）
「男女間の平等や助け合い」
（男性　13～15 歳、女性 13～15 歳）
「結婚」
（男性　13～15 歳、女性 16～18 歳）
「離婚」
（男性　13～15 歳、女性 13～18 歳）
「男女間の平等や助け合い」
（男性　10～12 歳、女性 10～12 歳）
「性に関する倫理や道徳」
（男性　13～15 歳、女性 13～15 歳）
****

また，「個人によって異なる」という見解が 10％以上の対象者から示されたものは，「多様な性のあり方」「結婚」「離婚」であった。

性知識を得るべき年齢について３歳階級カテゴリの順位和と平均ランクを子どもの有無別に算出し，Wilcoxon の順位和検定を行なった(表２)。各年齢カテゴリは「３～６歳」を１，「６～９歳」を２，「１０～１２歳」を３，「１３～１５歳」を４，「１６～１８歳」を５，「１９歳以上」を６とした。順位ランクが低いほど，早い段階において性に関する各項目を教えてもらいたいという傾向を表す。

子どものいる対象者において，より早く知るべきだと読み取ることのできた項目は，「男女の身体の違い」「身体の仕組み」であった。一方，「避妊方法」「人工妊娠中絶」「エイズとその予防」「結婚」「離婚」については，子どものいる対象者は，より遅く知るべきだと読み取ることができた。

Ⅳ．考察

（１）性知識の情報源

長らくステレオタイプに言われてきたことがある。「子どもたちはマスコミなどから不正確でゆがんだ情報を得ている」と。マスコミに流れる性に関する知識や情報を，不正確でゆがんだものだと，その検証もせずにステレオタイプで言及した言説である。もし，この言説が正しければ，年齢が若い世代ほど，上の世代よりも，より正確でゆがんでいない性知識を身につけていなければならない。マスコミを情報源とするものが減少し，学校を情報源とするものが 20％弱から 70％弱に激増しているのだ。

少なくとも今回の全国ランダムサンプリング調査から上記のようなステレオタイプの言説は修正を迫られそうだ。まず，性知識に関しては，マスコミから得ているものは年を追って減少してきている。また，マスコミから知識を得ているものの割合，あるいは，学校から知識を得ているものの割合は，得ている性知識の質にはそれほど関連はないという可能性がある。

20-24 歳の年齢階級から，その上の世代

まで第1位であった友だちが第2位に転落しており，かわりに学校が第1位に浮上してきている。10年前前後に学校システムを通過した世代である。この世代と，学校性教育が開始された年代とは一致している。子どもたちの性知識のなさ，あるいは，不正確さやゆがみを，言及するのならば，いまはマスコミではなく，学校にその目を向けるべきかもしれない。少なくとも，マスコミを諸悪の根源のごとく祭り上げる時代は過ぎ去ることになろう。

（2）性知識をいつ得るべきか

今回とりあげた15項目のすべてにおいて，選択肢の最頻値は，小学校後半から高校にあてはまる年齢群であった。これをもってして，学校を終えるまでにすべての事柄を学校で教えるべきだというのは早計である。ニーズがあるからといってそれを教えるということが学校教育を意味するとは限らないからだ（子どもがほしがるからといって，モノを買い与えることが子育てを意味するとは限らないのと同じだ）。性に関してより直裁的なニーズがあるからといってそれに対応するのであろうか。また，ニーズがあるからといって，それを学校で教えたところでその効果がどうなるかが学術的に検討されていないという理由も大きい。ましてや，子どもたちの性行動にどれほど影響があるかわからないと議論されている性知識である。

しかし一方で，子どもを持つ親にとってみれば，ことは深刻である。家庭教育機能や地域教育機能が落ちてきている。現に，友だちから性知識を得るものは減少中であるし，自然に得ているものも減少中である。マスコミを情報源とするものも減少中である。親は世の東西を問わず，性について子どもと語りえない。権威付けされた機関，すなわち学校に頼るしかないという実情はこのあたりにある。

では，子どもを持つ親たちは，どのような事柄をいつごろ知るべきだと思っているのだろうか。ひとつ明らかなことは，子どもがあろうがなかろうが，「離婚」「結婚」「多様な性のあり方」については，個人によって異なるとするものが少なくはなかったということだ。集団でこれらを教えようとすると（子どもが性行動を開始していないような低年齢集団でさえも），一概にこれらについて何かを言うこと（クラス単位の学校性教育では一概に何か言わざるを得ない）になる。その「一概」に該当しない子どもへの影響を対象者は考慮したのだろう。

子どもを持つ親には，またこのような特徴があった。すなわち，「男女の身体の違い」「身体の仕組み」のような性に関する基本的な事柄はできるだけ早く知るべきだという集団的な傾向がみられ，また，「避妊方法」「人工妊娠中絶」「エイズとその予防」「結婚」「離婚」のような事象については，よりあとで知るべきだという傾向があったことだ。何もかも早いうちからというわけではなかったことが得られた。子どもに何を教えるかについては親の人権にかかわる事項であることをここではおさえておきたい（世界人権宣言第26条を参照）。「避妊方法」「人工妊娠中絶」「エイズとその予防」「結婚」「離婚」などについて，親に受け入れられないほどの低年齢で学校で教えることは，その意味からも好ましくないことであるといえよう。

V．まとめ

本研究班が実施した全国ランダムサンプリング調査「男女の生活と意識に関する調査」を題材に，性知識に焦点を当てた解析をおこなった。その結果，20-24 歳群以下においては，性知識の情報源の第１位は学校になっており，その上の世代の友だちを抜いていた。友だちから性知識を得るものは減少中であり，自然に得ているものも減少中であった。マスコミを情報源とするものも減少中であった。子どもたちはマスコミから不正確でゆがんだ知識をえているので，という前提からはじまるステレオタイプな言説は見直されるべき時に来ている。

また，子どもの有無により，いつ性知識を得るべきかの回答に違いがみられた。子どもを持つものは，性の基本的事項についてはより早く知るべきだと思っており，性のトラブル・予防や諸相についてはより遅く知るべきだと思っていた。

今後は，学校以外のルートにおいて，これらの社会的ニーズに対応するプログラムやアプローチを開発する必要がある。その場合には，子どもを持つ親の意向を十分に反映しなくてはならない。また，自然に身についたというルートも見直す必要がある。なぜならば，その場合は知識以外のものも自然に身についた可能性があるからであり，コミュニケーションの観点も含めて，これからの研究課題にしたいと考える。

表1．性に関することや避妊方法に関する知識の情報源

		20歳未満	20～24歳	25～29歳	30～34歳	35～39歳	40～44歳	45歳以上	Row total
Q14M01	N	91	83	101	89	65	81	55	565
教師学校の授業	%	67.9	56.5	45.1	35.6	25.9	31.0	19.7	36.5
Q14M02	N	4	3	9	6	1	8	16	47
保健医療者	%	3.0	2.0	4.0	2.4	0.4	3.1	5.7	3.0
Q14M03	N	6	4	5	6	6	0	1	28
親	%	4.5	2.7	2.2	2.4	2.4	0.0	0.4	1.8
Q14M04	N	1	1	2	2	5	2	7	20
きょうだい	%	0.7	0.7	0.9	0.8	2.0	0.8	2.5	1.3
Q14M05	N	1	2	5	2	2	2	9	23
親以外の大人	%	0.7	1.4	2.2	0.8	0.8	0.8	3.2	1.5
Q14M06	N	56	66	109	118	128	126	130	733
友だち	%	41.8	44.9	48.7	47.2	51.0	48.3	46.6	47.4
Q14M07	N	38	56	93	121	140	142	126	716
マスコミ	%	28.4	38.1	41.5	48.4	55.8	54.4	45.2	46.3
Q14M08	N	1	2	0	1	1	0	1	6
インターネット	%	0.7	1.4	0.0	0.4	0.4	0.0	0.4	0.4
Q14M09	N	20	23	39	4	42	50	77.	295
自然に身についた	%	14.9	15.6	17.4	17.6	16.7	19.2	27.6	19.1
Q14M10	N	4	4	6	5	6	6	10	41
学んだことはない	%	3.0	2.7	2.7	2.0	2.4	2.3	3.6	2.7
計	N	136	147	224	250	251	261	279	1546
	%	8.7	9.5	14.5	16.2	16.2	16.9	18.0	100.0

表2．子どもの有無別にみた性知識を得るべき年齢カテゴリの平均ランクと順位和

項目名	子どもの有無	N	平均ﾗﾝｸ	順位和	p
男女の身体の違い	いる	840	676.53	568283.50	<.001
	いない	574	752.82	432121.50	
	合計	1414			
身体のしくみ	いる	847	697.97	591183.50	<.05
	いない	582	739.78	430551.50	
	合計	1429			
受精から誕生の仕組み	いる	848	706.64	599231.50	n.s.
	いない	585	732.02	428229.50	
	合計	1433			
	いる	834	722.51	602575.00	

	いない	575	679.60	390770.00	
	合計	1409			
人工妊娠中絶	いる	810	702.18	568762.00	<.01
	いない	551	649.87	358079.00	
	合計	1361			
エイズとその予防	いる	841	733.09	616528.50	<.05
	いない	588	689.13	405206.50	
	合計	1429			
性感染症について	いる	839	724.47	607831.00	n.s.
	いない	581	690.33	401079.00	
	合計	1420			
コンドームの使い方	いる	802	694.73	557169.50	n.s.
	いない	556	657.54	365591.50	
	合計	1358			
多様な性のあり方	いる	759	659.51	500567.50	n.s.
	いない	536	631.70	338592.50	
	合計	1295			
性的被害	いる	812	691.73	561683.50	n.s.
	いない	560	678.92	380194.50	
	合計	1372			
男女間の平等	いる	825	710.15	585876.50	n.s.
	いない	579	691.59	400433.50	
	合計	1404			
結婚	いる	752	662.37	498098.50	<.05
	いない	530	611.90	324304.50	
	合計	1282			
離婚	いる	670	593.56	397686.00	<.05
	いない	474	542.73	257254.00	
	合計	1144			
コミュニケーション	いる	807	699.43	564437.00	n.s.
	いない	564	666.79	376069.00	
	合計	1371			
倫理や道徳	いる	796	673.64	536220.00	n.s.
	いない	557	681.80	379761.00	
	合計	1353			

Ⅲ．研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
平成14年度厚生労働科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業)研究「望まない妊娠、人工妊娠中絶を防止するための効果的な避妊教育プログラムの開発に関する研究」班	男女の生活と意識に関する調査報告書	佐藤郁夫	性に関する知識・意識・行動について	(社)日本家族計画協会	東京	2003年	103

雑誌・機関誌

発表者名	論文タイトル	発表誌名	巻名	ページ	出版年
北村邦夫	「男女の生活と意識の関する調査」結果から～性教育の新しい課題を提起する～	現代性教育研究月報	21巻7号	1-3頁	2003年
北村邦夫	男女の生活と意識に関する調査	婦人新報	1236号9月号	2-5頁	2003年
北村邦夫	第26回日本産婦人科医会性教育指導セミナー(まとめ)	産婦人科の世界	56巻1号	71-74頁	2004年
北村邦夫	「男女の生活と意識の関する調査」報告ー責任ある性行動！ 普段からの親と子の会話	(社)日本家族計画協会機関誌「家族と健康」	第590号・平成15年5月1日	4-5頁	2003年
北村邦夫	中絶防止対策の推進に経口避妊薬が	(社)日本家族計画協会機関誌「家族と健康」	第600号・平成16年3月1日	7頁	2004年

新聞等

新聞名	タイトル	発行年月日
産経新聞	望まぬ妊娠、性の乱れ･･･親子の会話が防止策	2003 年 5 月 26 日
毎日新聞	10代の性行動･親子の対話が歯止めに	2003 年 6 月 13 日
JOICFP NEWS	Communication Key to Responsible Sexual Behavior	No.349 July 2003
北海道新聞他(共同通信配信)	揺れる思春期･大切な親子の会話	2003 年 9 月 17 日
毎日新聞	10代の妊娠中絶7年ぶりに減少	2004 年 2 月 1 日
東京新聞	10 代の妊娠中絶が減少	2004 年 2 月 7 日